

事物 (res) としての観念

——スピノザ観念説の特異性の所在——

榮福真穂

0. はじめに

17 世紀の哲学者たちは、みなデカルトの観念の教説（以下、観念説と呼ぶ）の影響を受けつつ、独自の観念説を展開していった。本稿が主題とするスピノザ（1632–1677）もまた例外ではない。彼の観念説が非常に特異なものであることは、とりわけ真理論の文脈においてよく取り上げられるため、広く知られている。たとえば Alquié (2003) や上野 (2005) といったスピノザ哲学の概説書においては、彼の独特の真理論との関連の中で観念への言及がなされている。ごく簡単に言えば、スピノザの真理論はいわゆる「対応説」を採らず、真なる観念の内的な徴標によって真理性を担保するという方策を採る点に特徴がある、といったものである。このような認識論的・真理論的側面は、たしかにスピノザの観念説の特筆すべき一側面であることは疑い得ない⁽¹⁾。しかし、観念の真偽が問題となるより手前のところで、そもそも観念とはいかなる存在であるのかということもまた、取り組まれるべき基礎的な問いである。

「スピノザにおける観念はいかなる存在であるか」というこのシンプルな問いは、少し考えてみるならば、それ自体が正当化を要するものであるように思われる。というのも、たとえばロックのように観念を「心象、思念、形象が意味するものすべて」(whatever is meant by Phantasm, Notion, Species) あるいは「思考に際して心がたずさわることのできるすべて」と考えるほうがおそらく一般的だからだ (Locke, 1975, p. 47)。この場合、観念は単に心のうちにのみある、心によって把握されるかぎりにおいてのみある、ということになり、その「存在」を改めて問うことはあまり意味をなさない。

しかし、スピノザにおける観念は、必ずしも「心がたずさわる」という限定を受けるとはかぎらないのである。たしかに、観念の「定義」である 2def3⁽²⁾には「観念とは、精神が思惟する物であるがゆえに形成する精神の概念 (conceptus) のことと解する」とある。しかしゲルーの言うように、この定義は狭い範囲の観念しかカバーできていない (Gueroult, 1974, p. 26)。「神のうちには必然的に、神の本質の、ならびに神の本質から必然的に生起するあらゆるものの観念が存在する」(2p3) のであり、精神がその観念を形成しないものであっても、神（すなわち自然）のうちには観念が形成されているはずだからだ。つま

り、スピノザにおける観念は必ずしも心のうちにのみあるものではない。そうではなく、2p3に言われるように「神のうちに […] 観念が存在する」のであり、スピノザにおいてそれは世界のうちに存在することと同義である。そのような「観念」については、どういう意味で神ないし世界のうちに「ある」と言われうるか、問うてみる余地は大いにあるだろう。

したがって本稿は、スピノザにおける観念がいかなる存在であるかを解明することを目指す。こうした探求、いわば観念の存在論的な探求は、十分になされてきたとは言い難いものの、いくつかの先行研究によって試みられてきた。たとえば Della Rocca (2003) はその優れた一例である。そこでは、デカルトとの差異を通じてスピノザの観念説の特異性が「能動性」に見出される。その結論の是非はのちに検討するため措いておくが、デカルトとの差異による探求という手段は私達にとっても有効であるように思われる。スピノザの観念説は他の多くの部分と同様、明らかにデカルトの影響を受けているため、そこから逸脱する部分にはスピノザの意図や主張の力点を読み込むことができるからである。本稿もデラロックに倣い、デカルトの観念説から逸脱する部分においてスピノザの特異性を見出す方法を採ろう。

本稿の議論の手順を簡単に示しておこう。まず、上述のデラロックの解釈を紹介し、そこから得られる観念の「能動性」という帰結と、その問題点を指摘する。次にその問題点の解決を通じ、より妥当な解釈へ、すなわち観念の「事物性」に特異性を見出す解釈へと発展させる。最後に、本稿が従来の解釈を修正しつつ提示した解釈が、どのような射程を持つものであるかを検討したい。

1. 観念の能動性：デラロックの解釈

「はじめに」で述べたように、スピノザの観念説はその認識論的・真理論的側面に関心が向けられがちであるが、本稿と同じく存在論的探求を試みている研究もある。なかでも本節では、デラロックの ‘The Power of an Idea: Spinoza's Critique of Pure Will’ (2003) を足掛かりにしつつ、スピノザの観念説に迫っていこう。

デラロックの主張の中心は、2p49に示される主張をきわめて強い反デカルト的な主張として解釈するというところにある。

2p49：精神の中には観念が観念である限りにおいて含む以外のいかなる意志作用も、すなわちいかなる肯定ないし否定も存しない。

2p49d: [...] そこで今ここにある一個の意志作用を、——たとえば三角形の三つの角の和が二直角に等しいことを精神に肯定させる思惟様態のことを考えてみよう。_ [...] この肯定は (2ax3 より) 三角形の観念なしには在ることもできない。 [...] また逆に三角形のこの観念は、この肯定なしには在ることも考えられることもできない。したがって (2d2 より) この肯定は三角形の観念の本質に属し、結局三角形の観念そのものにほかならない。

2p49 が置かれている文脈を確認しておこう。この定理は、精神の自由な意志を否定する 2p48 と内容上強く関連している。2p48d では、精神が思惟の様態であり、したがって様態同士の必然的な因果連鎖の中にあるということから、精神に自由で絶対的な意志能力など無いことが証明される。このことは続く 2p48s において、以下の仕方で捉え直される。すなわち、意志能力ないし肯定し・否定する能力は抽象によって想像された「一般的概念」であって、実はその都度の肯定作用・否定作用に還元されてしまうものにすぎない、ということである。ここまでが 2p48 およびその備考の主な内容であった。しかし、スピノザは意志能力をその都度の肯定作用・否定作用に還元するだけでは満足せず、今度はそうしたその都度の作用を観念へと還元する必要があると考え、2p48s の最後にそのことが予告されている⁹⁾。こうした流れを受けて、個々の肯定作用・否定作用を観念へと還元するのが 2p49 なのである。

さて、こうした 2p49 は二つの主張によってサポートされる。一つは「肯定は観念なしにはありえない」という主張、もう一つは「観念は肯定なしにはありえない」という主張である (下線部)。このうち前者は、2ax3、すなわち観念は他の思惟様態に対し先行するという公理から直接引き出されているが、これは実はデカルト的な公理である (Cf. AT, VII, 377)。デラロッカによれば、先行研究においてはスピノザが直接参照している 2ax3 に引き付けてこの 2p49 全体が解釈されるのが通例となっており (Della Rocca, 2003, p. 202)、それゆえ 2p49 が、とりわけその後者の主張がいかに深く「反デカルト的」であるかが十分に理解されてこなかったという (Della Rocca, 2003, pp. 224–225)。

デラロッカの問題意識をもう少し敷衍しておこう。前述のように、2p49 は 2p48 の流れを汲んだものであり、2p48 と 2p49 は協働して自由意志を観念へと還元しようとするものだと言える。したがって、2p49 は自由意志の否定という文脈においてすでに明白に反デカルト的なものであり、このことは従来の研究においても十分に共有されてきた。そうした表層的な不一致が淵源するところの、より深い不一致に着目すべきだ、というのがデラロッカの問題意識である (Della Rocca, 2003, p. 224)。デラロッカはこの課題を、前者すなわち他

の思惟様態に対する観念の先行性の主張よりもむしろ、後者すなわち観念がそれ自体において肯定作用を含むという、観念そのもののあり方にかかわる主張に重心を置いて解釈することによって浮き彫りにしようとしている。そうして導き出される結論は、ひとことで言うならば、観念が「能動」(actio)であるかどうかはデカルトとスピノザの間のより深い不一致がある、というものである (Della Rocca, 2003, p. 224)。この actio (action・英) という語は、「作用」や「活動」の意味をも含み持つものだが、ここでは「受動」との対比において「能動」と訳した。というのも、デラロッカによれば、後者の主張、すなわち「観念は肯定作用を必ず含む」という主張には、デカルトにおける観念の受動性への批判が込められているからだ (Della Rocca, 2003, p. 207)。このように、デラロッカの議論は、観念そのものに着目する点で本稿と問題を共有していると言えよう。

さて、以上のようなデラロッカの議論は、観念の能動性あるいは活動性という従来あまり主題化されてこなかった重要な点を明るみに出したものであり、その帰結にもある意味では同意できる。しかし私達は、デラロッカの議論には問題があると考え。それは、両者の差異を観念の「能動性」をめぐる差異とみなす点である。両者の間には「自由意志の否定」以上の差異、すなわち観念そのもののあり方をめぐって対立しているというデラロッカの結論には本稿も同意する。しかし、対立の焦点は観念の「能動性」にはないように思われる。というのも、実はデカルトは観念をたんに受動的なものとみなすのではなく、「知性の作用」(actio intellectus)として規定してもいるからだ。次節ではデカルトのテキストにも目を向けつつ、この点を検討しよう。

2. 「観念＝能動（作用）」説の反デカルト性？

本節では、上述のデラロッカの議論の問題点を検討することを通じて、観念の「能動（あるいは作用、活動）」にスピノザの特異性を見出す解釈の妥当性を検討していく。

2.1 デカルトにおける観念の能動性と思惟様態

前節で見たように、デラロッカは、デカルトにおける観念は単に「受動的」なものであり、それへの批判が込められているという意味で、2p49に示される観念の能動性をスピノザの「反デカルト主義」の現れだと捉えていた。しかし実のところ、デカルトにおける観念は、デラロッカの言うように単に「受動的」なものではなく、一方では「表象像」として、他方では「知性の作用」(actio intellectus)として規定される二義的なものであることに注意せねばならない (AT, VII, 8)。これらの二義性のどちらを本筋と見なすべきかという問題は、デカルトの同時代から現代に至るまで決着のつかない解釈上の問題となっており、多くの穏当な解釈者はどちらか一方だけを取り上げることはしないのが通例である (e.g.

Buzon & Kambouchner, 2011, pp. 53–54; 山田, 1994, 192–197 頁)。つまり、「知性の作用」としての観念もまた、デカルトの観念説の無視できない一面なのである。

さて、『省察』冒頭の「読者への序文」で提示される観念のこれらの二義性は、第三省察においては観念の「想念的实在性」(realitas objectiva)と「形相的实在性」(realitas formalis)との対比として再び現れる。この「形相的／想念的」は近世に特有の対概念である⁽⁴⁾。近世スコラやデカルトにおいて、「形相的」とは「現実存在するものとして」といった意味で用いられ、それに対し「想念的」は「表象対象として」といった意味で用いられてきた⁽⁵⁾。ここでは観念の「形相的实在性」が「思惟様態」として規定されている (AT, VII, 41)。多くの解釈者がそうしているように、この「形相的实在性」は「知性の作用」と重ね合わせて理解してよいだろう。つまり、デカルトにおいて観念は、表象対象としては「表象像」と言われ、現実存在するものとしては「知性の作用」あるいは「思惟様態」と言われている。このうち、端的に受動的と言えるのは前者にかぎった話なのである。

2.2 スピノザにおける観念の能動性と思惟様態

ここで、スピノザにおいてもまた、観念が「思惟様態」として規定される局面があることを指摘しておく必要がある。

2p5d : 観念の形相的有は思惟の様態である。言いかえれば思惟するものである限りにおいての神の本性をある一定の仕方では表現する様態である。そこでそれは (1p10 より) 神の他のいかなる属性の概念も含まず、したがってまた (1ax4 より) 思惟以外のいかなる他の属性の結果でもない。ゆえに観念の形相的有は、神が思惟するものと見られる限りにおいてのみ神を原因と認める […]。

ここでは観念の「形相的有」は「思惟の様態」と言われている。デカルトにおける「形相的实在性／想念的实在性」の場合と同様、この「形相的有」(esse formale)は「想念的有」(esse objectivum)と対比的な語である。したがって、観念の「形相的」すなわち現実存在するものとしての規定は「思惟様態」である、という点はスピノザとデカルトに共有されている。

さらに、観念が形相的には思惟様態であるという点は、実はデラロッカの主張する観念の「能動性」ともかかわっている。デラロッカは「能動」という語の分析から議論を始めているが、そこでは観念が思惟様態であることが隠れた前提としてはたっているからだ。デラロッカによれば、スピノザにおける弱い意味での「能動」は、「何らかの結果を生じさせる」ことを意味する (Della Rocca, 2003, p. 207)。次に、「スピノザにとって、各事物は神

の力の表現であり、それゆえに各事物は原因である」のであり、このことは「観念にも適用される」(Della Rocca, 2003, p. 207)。デラロッカはこの点をスピノザの記述によって裏付けていないが、〈各々の事物は神の力能の表現であり、原因である〉こと、そしてこれが観念にも適用されることを改めて裏付けておくならば、以下になるだろう。

まず、1p15において「すべて存在するものは神のうちにあり、そして神なしには何ものも存在しえずまた考えられえない」ことが与えられる。ここから、1p25c「個物(res singularis)は神の属性の変状、あるいは神の属性を一定の仕方で表現する様態にほかならない」ことが導出される。ここに「個物=様態」が成立する。また、1p36においては「すべての事物(res)から結果が生じる」ことが与えられる。この1p36の証明は、「実在するすべてのものは神の本性あるいは本質を、言いかえれば神の力能を(1p34より)一定の仕方で表現する。したがって実在するすべてのものからある結果が生起しなければならない」というものである。この証明における、「神の本性あるいは本質を、言いかえれば神の力能を一定の仕方で表現する」という表現に着目しよう。これは、1p25cにおける「神の属性を一定の仕方で表現する」という表現と酷似しているだけでなく、実質的に同じことを表現するものだと言える。というのも、1d4で定義されているように、「属性」とは「実体(つまり神)の本質を構成する」ものであるので、神の属性を表現することと神の本質を表現することとは事実上同じことであるからだ⁶⁾。したがってここに「個物=様態=事物」が成り立つ。個物・様態・事物に関しては共通して、「神あるいは実体の力能(あるいは本質・属性)を一定の仕方で表現する」という規定が当てはまるのである。「各々の事物は神の力能の表現であり、原因である」というデラロッカの記述は、厳密にはこうして正当化される。そして、すでに確認されたように、観念の現実存在するものとしてのあり方は「思惟の様態」なので、当然この規定は観念にも適用可能であり、「あらゆる観念は少なくとも弱い意味で能動である」という帰結が引き出される。デラロッカによれば、スピノザにおける弱い意味での「能動(あるいは活動)」は、「何らかの結果を生じさせる」ことを意味する。したがって、1p36(「すべての事物から結果が生じる」)より、すべての事物=様態=個物は「少なくとも弱い意味で能動」だと言えるのである。このように、スピノザにおける観念の能動性の導出においては、観念の形相的有が思惟様態であるという規定が根拠としてはたらいっている。

以上より、デカルトにおいてもスピノザにおいても、観念の形相的実在性—思惟様態—能動という規定においては何ら相違をもたない、ということが明らかとなった。とはいえ、デカルトにおいてこれは「二義性」のうちの一面を取り上げた図式にすぎず、もう一方の側面、すなわち「表象像」としてのあり方(想念的なあり方)においては、たしかに観念

は単に受動的なものとみなされるだろう。そしてスピノザが明確に「観念＝表象像」説を斥けている点を考慮すれば、たしかに観念の能動性の強調という点にスピノザの特異性を見出すことは可能である。デラロックの議論は、このような限定のもとでのみ妥当なものと言われうるのである。

3. 観念の「能動性」と「事物性」

3.1 スピノザにおける観念の「形相的有」の2つの帰結

前節において、スピノザの観念説の「反デカルト性」は、単に観念の能動性に求めることはできないことを示した。それではスピノザの観念説の反デカルト性、ひいては独自性はどこに求めるべきだろうか。前述のように、観念を「表象像」と同一視することを認めるかどうか、という点に一つの答えがあると言えよう。しかし私達は、観念そのものがいかなる存在であるかという観点、すなわち「形相的」側面においても、両者の違いを見出すことができると考える。

上述のように、デカルトにおいてもスピノザにおいても、観念が形相的実在性（有）— 思惟様態— 能動であるというあり方は共有されていた⁷⁾。それでは何が違うのかというと、「形相的実在性」あるいは「形相的有」の内実が異なるのである。その差異は、具体的には以下の2点に見いだされうる。まず、デカルトにおいては、観念の「形相的実在性」は基本的に結果を産出しない。デカルトにおいては、観念対象となる事物（原因）と当の観念（結果）との間に内容上の因果関係が成り立つことが重要である。たとえば第三省察における神の實在のアポステリオリな論証において、「神の観念」からその内容上の原因である神そのものへと遡る推論が成り立つのは、観念とその対象との間に内容上の因果関係が成り立つからである。したがってデカルトにおいては、「結果」としての観念のあり方が強調される。これに対し、スピノザにおいては観念が因果系列の構成項となるので、観念は自らが結果であると同時に、原因として次なる結果を産出する。このことは、前節においてデラロックの議論を補う仕方ですでに確認した。以上より、スピノザの観念の形相的有すなわち思惟様態は、別の観念の原因になりうるという点に1つめの特異性がある。

次に、デカルトにおける観念の「形相的実在性」は、決して別の観念の対象になることはない。これに対し、スピノザは観念も「形相的本質」（『知性改善論』における用語だが、「形相的有」とほとんど意味は変わらない）を持つということから、それが「想念的本質」の対象となる資格を持つことを導出している。こうしてスピノザにおいては、彼独自の反省作用を表現する概念である「観念の観念」が現れる。このように、スピノザにお

ける観念の形相的有すなわち思惟様態は、別の観念の対象になりうる、という点において2つめの特異性を持っている。

以上より、①別の観念の原因となる ②別の観念の対象となる という2点に、スピノザの観念説の存在論的な「反デカルト性」があるということが得られた⁽⁶⁾。本稿にとってより重要なのは前者のほうであるが、この前者についてはさらに考察が必要だろう。デカルトにおける観念の「形相的実在性」が結果を産出しないのは認めるとしても、それは「知性の作用」とも言われているからである。「知性の作用」としての観念が結果を産出しないとするならば、なぜそれは「作用（あるいは活動、能動）」と言われうるのか、ということが当然問題になる。

結論から言えば、デカルトにおける「知性の作用」は「結果を産出しない」とは一概に言えないのであり、①はより厳密な言い方に修正が加えられるべきである。デカルトは、「この語 [=idea] は一方では質料的に、知性の作用、と解することができ、[...] しかし他方では表象的に、そういう作用によって表象されたもの」だと説明する (AT, VII, 8)。つまり、観念は表象する作用そのものであり、表象された内容でもあると言われている。ここから、この「作用」を「表象像を産出する作用」と解釈することは可能である。しかし、その産出された「表象像」には、現実中存在する事物としての実在性は与えられない。「知性の作用」自体は、「形相的実在性」と言い換えられることから明らかなように、現実中存在する事物の資格を何らかの仕方を持っている。しかし、それが産出する結果すなわち表象像は、現実中存在する事物の資格を全く持たない。したがって、①はより厳密に、デカルトにおける観念の「形相的実在性」は「形相的な」結果を産出しない、と修正されるべきだろう。ここには、現実中存在する事物の領域とそうでない心的な領域の間を架橋するきわめて曖昧な立ち位置に観念が置かれている、というデカルトに特有の図式が浮かび上がってくる。

これに対し、スピノザにおける観念の形相的有が産出する結果は、観念の想念的有ではなく別の観念の形相的有である。つまり、そこでは単なる心的な像としての観念が産出されているのではなく、「現実中存在するもの」としての観念が産出されているのである。そうして産出された「現実中存在するもの」としての観念もまた、さらに別の観念を産出する原因としての資格を有する。さらにそうして産出された観念もまた……と無限に続く。観念がこのように原因としての資格を有することによって、観念の原因を思惟属性外の何か（たとえば物体）に求める必要がなくなり、諸属性間の厳密な区別と相互作用の禁止からなる平行論が成立する。あるいは逆に、平行論の体系が観念にこうしたあり方を要請したのかもしれないが、いずれにせよここでは上述のデカルトの場合のような曖昧さは排除

される⁹⁾。スピノザにおける観念は、現実存在するものの領域と心的な領域とを、少なくとも因果的には架橋しないのである。

3.2 観念の「事物性」とその射程

以上より、スピノザの観念説のデカルトに対する特異性は、①観念は形相的な結果を産出する ①観念は別の観念の対象となる という二点に見出すべき、という帰結が得られた。私達は観念のこうしたあり方を、観念の「事物性」と呼びたい。というのも、この二つの特徴を備えたものは、デカルトにおいては「事物」(res)と呼ばれ、また事物と観念とが対比的に捉えられていたからである。それゆえ、デカルトからの逸脱をもっとも鮮明に表すのは観念の「事物性」であるように思われる。

デカルトにおける「事物」とはどのようなものであったか確認しておこう。デカルトにおいては、たとえば第三省察に顕著であるように、事物そのものの「形相的実在性」と観念の「想念的実在性」とが対比され、前者には「原因」、後者には「結果」としてのあり方が帰属される。また、観念の対象となりうるのは前者だけである。このように、①形相的な結果の原因となる ②観念の対象となる という二点は「事物」に帰属されるあり方である。そして、たとえば『哲学原理』の第1部57節で「属性あるいは様態と言われるものには事物そのもののなかに存するものもあるが、たんにわれわれの思惟のなかだけに存するものもある」と言われているように、事物と思惟とはしばしば対比的に扱われる(AT, VIII, 26-27)。デカルトは、観念が物的事物と同じ仕方で「事物」であるとは決して認めないだろう¹⁰⁾。

これに対し、スピノザにおける観念は思惟様態であるがゆえに事物でもあり、その内実を見ってみるならば、上記の①②の性質を備えている。つまり、まさしくデカルトが「事物」に認めた性質を観念が備えているのである。ここから私達は、スピノザの観念説がデカルトから逸脱している点は、観念の形相的有に付与された「事物性」にあると考える。

したがって本稿の主張は、スピノザにおける観念の特異性は、その「能動性」に見出されるよりもむしろ、「事物性」に見出されるほうが適切である、ということになる。さて、ここまで私達が行ったことは、デラロックの解釈に微々たる修正を加えたにすぎないように思われるかもしれない。事物であることの内実は「形相的な結果を産出する」ことであり、「事物である」とことと「能動である」ことはことがらとしてはほぼ同じ事態を指しているので、本稿とデラロックの相違はたんに強調点の相違にすぎないとも取れるからである。しかし私達は、この修正はより大きな論点に直結する、一定の意味を持つものだと考えている。以下では、観念の「事物性」を主張することがいかなる射程を持つのか、二通りの仕方で示しておきたい。

(1) 思惟-事物間の存在論的ヒエラルキーの解体

観念の「事物性」を主張することの意味について、とりわけ存在論としてのインパクトを考察してみよう。スピノザの主張を真面目に受け取るなら、物体が事物であると言われるのとまったく同じ意味で、観念は事物であると言われねばならない、ということになる。観念は「形相的」には、すなわち存在論的には、様態・個物・事物として、他の事物（たとえば物体）と何ら遜色ない実在性⁽¹⁾を持っているからである。したがって観念は、精神によって生み出され精神によって把握されるいわば「観念論」的な枠組みには明らかに収まらない、実在的な存在者なのである。

他方でデカルトは、すでに述べたように、観念が物体的事物と同等に事物であるとは決して認めないだろう。たしかにデカルトは観念の「形相的」側面、すなわち「現実中存在するもの」としての側面を認めてはいる。ただしそれは、物体が事物であるのと同程度に認められるものではない。デカルトが思惟の外の事物と観念とを対比的に扱うとき、後者の実在性は前者の実在性よりも必ず低く見積もられる。このことはまた、「結果が持つ実在性は必ず原因も持っていないなくてはならない」(AT, VII, 40) という公理を介して、事物を原因、観念を結果とみなす見方とも結びつく。心的なものはそうでないものに対して実在性の上で劣る、という発想はデカルトに限らず、多くのパターンの認識論が陰に陽に前提としているように思われる。

これに対しスピノザにおける観念は、物体が事物であるのと同じ意味で事物であり、現実中存在するものである。こうした「観念の実在論」とでも呼ぶべきスピノザの観念説は、現実中存在するものと心的なものとの間の存在論的ヒエラルキーを解体して、両者を実在性の上ではフラットにしてしまう。観念が事物であるという主張は、多くの認識論が暗黙のうちに前提とするヒエラルキーを解消する力を持っているのである。

(2) 認識主体の観念への還元

上述のように、デラロッカはスピノザにおける観念の能動性を主張していたが、その際、導出の根拠となる観念の事物性にはほとんど言及していなかった。デラロッカはそこではむしろ、2def3 に依拠することによって議論を補強している (Della Rocca, 2003, p. 207)。2def3 とはすなわち、「観念とは、精神が考えるものであるがゆえに形成する精神の概念であり、概念は精神の受動 (pati、はたらきを受けること) ではなく能動 (actio) を表す」という、まさしく観念の定義である。

しかしこの定義は、ある限定を蒙るものであることに注意せねばならない。ゲルーは 2def3 の「観念」の定義としての「狭さ」を、以下のように指摘する。曰く、「それは精神が持つ観念を定義しており、精神であるところの観念も、神が神自身や事物について持つ

観念も定義していない」(Gueroult, 1974, p. 26)。『エチカ』の体系において、観念は精神に関係しようがしまいが、あらゆる事物について存在するものであるにもかかわらず、2def3は「観念」一般ではなくて、精神が形成する限りでの「観念」としてしか定義されていない。ゲルーはこのバイアスについて、「そこでは、われわれが諸観念を、対象によってわれわれの中に生み出される受動としてではなく能動として捉えるという仕方、われわれの形成する観念に関係する先入見を排除する」ことが主眼になっているためだと説明している(Gueroult, 1974, p. 28)。

このように、デラロックは観念の能動性を主張する際に、それが「精神の能動(作用)」であるという限定を暗に受け入れているのである。このことはまた、デラロックが同じ文脈で「あるものの活動はすべてコナトゥスの結果である」というコナトゥス論を引き合いに出し、「観念が精神の作用(actio)であるとするならば、それぞれの観念は何らかの形で作用主体の維持と向上のための努力と結びついて」といって主張している箇所にも見てとることができる(Della Rocca, 2003, p. 208. 傍点引用者)。しかし、こうした前提、すなわち観念はそれが把握されるところの精神に依存するという前提は、むしろスピノザが覆そうとしたものではないだろうか。「はじめに」で述べたように、スピノザにおける観念は必ずしも心のうちにのみあるものではなく、2p3に言われるように「神のうちに[...]存在する」もの、つまり世界のうちに存在するものである。私達が検討した、そしてデラロックも検討している2p49は、精神の絶対的な意志を、個々の肯定作用へ、さらに個々の観念へと還元してゆく局面なのであり、そこに「精神の能動」を強く読み込むことは避けられるべきであろう。

そして、こうした方向性を突き詰めた先には、たんに精神の自由意志の解体だけにとどまらない、あらゆる認識主体の解体がある。デカルトにおいても観念は「能動(作用)」ではあるが、それはあくまで「知性の作用」なのであり、精神ないし有限知性の外にその存在の場を持つような観念は決して想定されていないだろう⁽¹²⁾。それに対しスピノザにおける観念は、有限知性の外にも存在しうる。ここにも「観念の実在論」が現れていると言えよう。

したがってこの観点から、2def3を主要な根拠として観念の「能動＝作用」を強調するのではなく、観念が「事物」であるという点を強調すべきだと考える。観念が「能動＝作用」すなわちactioであるという論点は、「知性の作用」のような認識主体の前提を残してしまうことにつながり、認識主体の絶対性を解消するスピノザのラディカルな主張を取りこぼしてしまうのである。

4. 結び

本稿の問いは、スピノザにおける観念はどのような意味で「存在する」のか、スピノザにおける観念は存在論的に何であるかというものだった。私達はデカルトとの比較を通じて、スピノザの観念説の特異性を、①観念が形相的な結果を産出する ②観念が別の観念の対象となる という二点に見出した。次に、こうしたあり方は、観念の「能動性」というよりもむしろ「事物性」と呼ぶべきであることを示した。つまり、スピノザにおける観念の存在論的身分は「事物」であり、それは物体が神あるいは世界のうちに存在するのと同じ仕方です。「存在する」のである。その上で、観念のこの事物性が、現実存在するものと心的なものとの間の存在論的ヒエラルキーの解体や、また認識主体の観念への還元直結する論点であることを素描した。このように、観念の事物性こそ、スピノザの「反デカルト性」あるいはラディカルさの中心をなすものである。以上が、本稿が明らかにしたことであった。

反対に、本稿で論じきれなかった点を挙げておこう。まず、「観念は物体と同等に現実に存在する事物である」という本稿の帰結からは、スピノザ哲学を唯物主義と捉えることへの疑義が生じてくる。従来の解釈にしばしば見られる唯物主義的傾向は、観念の事物性をどのように処理しうるのだろうか。さらに、本稿が明らかにしたように、スピノザと対照的にデカルトの観念が強い意味で「事物」ではないのだとすれば、デカルトにおける観念の形相的実在性・想念的実在性はいかなる意味で「実在性」であるのか。こうした論点は今後の課題としよう。

註

(1) 「十全／非十全」にかんするスピノザ自身の記述は以下のようなものである。「[...] 我々が『人間精神がこのことあるいはかのことを知覚する』と言うとき、それは、『神が無限であるかぎりにおいてではなく、神が人間精神の本性によって説明されるかぎりにおいて、このあるいはかの観念をもつ』と言うのにほかならない。また我々が『神が人間精神の本性を構成するかぎりにおいてのみでなく、神が人間精神と同時に他の物の観念をも有するかぎりにおいて、神がこのあるいはかの観念をもつ』と言うときに、それは『人間精神が物を部分的にあるいは非十全に知覚する』と言う意味である」(2p11c)。こうした考えの特異さについてはスピノザ本人も自覚していたらしく、続く 2p11s では「ここで読者は疑いもなく躓くだろう」と懸念を露わにしている。

(2) 本稿ではスピノザのテキストの参照に際して略号を用いる。文末の凡例を参照。

(3) 観念を「表象像」とみなす見方が斥けられるのも、この文脈においてである。2p48s の最後には以下のように言われる。「[...] 思惟を絵画に墮さしめないようにしてもらいたい (ne cogitatio in picturas incidat)。なぜなら私は、観念を、眼底に形成される——脳の中央に形成される、と言いたければ言ってもよい——表象像 (imago) とは解せず、思惟の概念 [把握作用] と解するからである」。観念は表象像ではないという主張と、観念は肯定・否定作用を必ず含むという主張は表裏一体のものである。

(4) スピノザにおいてこの「形相的有／想念的有」の区別がどのような意義を持つのかということは、それ自体大きな問題である。Cf. Gueroult (1974), pp. 65–72; Deleuze (1968), pp. 99–113; 平井 (2001)。

(5) 「想念的」(objectivus) はそれゆえ、しばしば「対象的」とも訳されてきた。これは「認識の対象となる」ということに重点が置かれた訳である。また、「表現的」「表象的」という訳もあるが、これは「表象作用を担う」という意味を重く取ったものだろう。以上は近世スコラ・デカルトの用法に共通の事情である。スピノザにおいては「想念的」という訳語がすでに定着しているので、本稿もそれに倣った。

(6) 1p25c においては「様態」というタームとの結びつきから「属性」という形而上学的色合いの濃い語が選択され、1p36 においてはより一般的に「事物」について、神の力能論の文脈から規定されたのだと考えられる。

(7) ここでデカルトにおける「形相的実在性」とスピノザにおける「形相的有」をほとんど同一視することについて、疑問を持たれるかもしれない。「実在性」と「有」とは別の用語だからである。しかし、本稿は両者の内実を吟味した上で、やはりほとんど同一視できるものだと判断した。まず、デカルトにおける「実在性」(realitas) にかんしては、檜垣 (2015) の整理するように、ens に対する res の意味から理解するのがよいだろう。それが何であるかを捨象して端的に「ある」ことを表すのが ens であり、これに対し「何かである」ことを表すのが res である。したがって「実在性」とは「何であるか」とでも言うべき、「本質」や「何性」に近い意味になる (檜垣, 2015, 1-14 頁)。次に、「有」(esse) にかんしては、これを不定詞ととるか名詞ととるかで話が変わってくるが、本文中でも引用した「観念の形相的有は思惟の様態である」という用例は不定詞(「存在すること」)だと意味が取れないので、名詞ととるべきである。そして、この文全体の意味をとるならば、「観念は現実に存在するものとして何であるかと言うと、思惟の様態だ」という意味になるだろう。つまり、観念の「形相的実在性」にしる「形相的有」にしる、それは「観念が現実に存在するものとして何であるか」を問う概念なのである。以上のような理由から、本稿は「形相的実在性」と「形相的有」を同一視した。

(8) なお、私達が見出したスピノザにおける観念の特異性は、いずれも平井 (2001) によって指摘されたものと重なる。平井は「観念が形相的有を持つことこの第一の意味」は「原因の資格を有する」ことであり、その第二は「観念対象の資格を有する」ことにあると述べている (平井, 2001, 76 頁)。ただし平井は、このうち後者およびその帰結としての「観念の観念」に重点を置いている。これに対し、むしろ前者に着目し、観念の存在論的身分にかんする記述として主題化するのが本稿の態度である。

(9) ここには、心身二元論の徹底化 (換言すれば、性質を異にするもの同士のあらゆる相互作用の否定) や作用原因への原因概念の一本化といった論点を読み込むこともできようが、本稿では立ち入らない。

(10) デカルトにおいて観念が「事物」と言われる場面もあるので、ここで補足が必要であろう。『省察』第一反論・第一答弁では、第三省察における「観念とはそれが知性の中に想念的にあるというかぎりでの、思惟された事物そのものである」という主張の是非が主題の一つとなっている。この言明は白水社『デカルト著作集 2』の訳注 (128 頁, 訳注 5) によればデカルト本人からの引用ではないものの、第一答弁でデカルト自身の主張として認められている (AT, VII, 102)。ここで「観念が事物である」と言われるのは、どのような意味においてだろうか。まず第一反論の著者カテルスは、観念対象が知性の働きを対象という仕方限定する事態を「全く外的な命名」と規定し、現実に存在するものではないのでその原因を探究することはできないと断じる (AT, VII, 92)。つまり、観念の想念的実在性から原因としての外的事物へと遡る第三省察の議論は妥当ではないという批判である。これに対しデカルトは、太陽の観念が「知性のうちに想念的にあるというかぎりでの思惟された事物である」と言われるとき、それは太陽の観念が現実に空にある太陽と同一であることを意味しないと答える。つまり、観念が「事物である」と言われるときの「事物」は、現実に (=形相的に) 存在するという強い意味で言われているのではない、ということである (AT, VII, 102)。そう断った上で、今度は「知性の中に想念的にある」という存在の仕方は、「事物が知性の外に存在する仕方よりもはるかに不完全ですが、それだからといって [...] 全くの無ではないのです」と主張している (AT, VII, 103)。デカルトは、一方では観念が強い意味で事物だとは言えないことを示し、他方ではそれは全くの空虚な存在ではないので原因の探究を許すものであることを示している。こうした繊細な議論はそれ自体が細かい検討を要すべき研究トピックであろうが、いずれにせよデカルトにおいて観念が「事物」だと言われるとき、それは「形相的」すなわち現実に存在するという意味で言われてはいない、ということが本稿にとって重要である。

(11) ここでの「実在性」は、カント以降の意味で取っても、近世以前の「もののしき」や「何性」の意味で取ってもかまわない。これらは両者とも、ラテン語の「事物」(res) に由来するものだからである。詳しくは檜垣 (2015, 1-14 頁)を参照。

(12) ゲルーは『哲学原理』と『デカルトの哲学原理』における「コギト」の相違に着目して同様の結論に至っている。すなわち、前者においては思惟の中に位置していた「コギト」が、後者においては実在としての身分を与えられるということである。ゲルーもまたこうした事態を、「実在論」という語を用いて表現している。(Cf. Gueroult, 1970, chap. 6).

凡例

*スピノザの著作についてはゲブハルト版を使用し、また以下の URL で公開されている電子テキストを参照している。Gebhardt, C.(Eds.), *Baruch de Spinoza Opera*, Retrieved 2021/06/09, from https://www.academia.edu/32414125/SPINOZA_OPERA_DE_CARL_GEBHARDT.pdf

『エチカ』からの引用に際しては、慣例に倣って略号を用いた。まず部をアラビア数字で、定義・公理・定理等を略号で、定義等の番号をアラビア数字で示し、必要ならば系・備考等を略号で併記した。本稿が用いた略号は以下の通りである。ax=公理 (axioma)、c=系 (corollarium)、d=証明 (demonstratio)、def=定義 (definitio)、p=定理 (propositio)、s=備考 (scholium)。たとえば、“E2p49s”は『エチカ』第2部定理49備考を意味する。また訳出の際は1951、畠中尚志訳『エチカ』、岩波書店を参照しつつ、適宜表現を変更した。

*デカルトの著作については、Adam, C. & Tannery, P. (Eds.), *Œuvres de Descartes*, Vrin.を用い、慣例に倣って「AT, 巻数, ページ数」と略記した。訳出の際は基本的に1967、井上庄七・森啓訳、『省察』、『世界の名著22』, 223-307 頁, 中央公論社を参照しつつ、適宜表現を変更した。

*引用文中の [] は引用者による挿入を表す。また、下線や傍点も引用者によるものである。

文献

Alquié, F. (2003). *Leçons sur Spinoza*, La Table ronde.

Buzon, F. & Kambouchner, D. (2011). *Le vocabulaire de Descartes*, ellipses.

Deleuze, G. (1968). *Spinoza et le problème de l'expression*, Minuit.

Della Rocca, M. (2003). 'The Power of an Idea: Spinoza's Critique of Pure Will', *Nous*, 37.2, 200–231.

Gueroult, M. (1970). *Etudes sur Descartes, Spinoza, Malebranche et Leibniz*, Georg Olms.

——— (1974). *Spinoza II – L'âme*, Aubier.

Machrey, P. (1997). *Introduction à l'Éthique de Spinoza - La deuxième partie - La réalité mentale*, éditions PUF.

上野修 (2005). 『スピノザの世界——神あるいは自然』, 講談社.

檜垣良成 (2015). 「Realität の二義性——中世から近世へと至る哲学史の一断面」, 『近世哲学研究』, 第19号, 1–39 頁.

平井靖史 (2001). 「スピノザにおける二つの平行論と観念の観念」, 『スピノザーナ』, 第3号, 69–90 頁.

山田弘明 (1994). 『デカルト「省察」の研究』, 創文社.

〔京都大学大学院博士後期課程・西洋近世哲学史〕